初學和歌式

讀方
詞寿

三

特別
ヘ4
8110
3

へ4
8110
3

○秋

立秋

立秋ハ秋ノ初ノ日ニテ今年ハ立春ヨリ十日ノ内ニ立秋ノ日アリ
物ノ枯ルヽ草木ハ秋ノ初ノ日ニ枯ルヽ物ナリ
ともいへハ又ハ草葉ノ色モ秋ノ初ノ日ニ色ヲ変ズルナリ
又萩ノ葉モ秋ノ初ノ日ニ色ヲ変ズルナリ
のきのつゆ　ハ秋ノ初ノ日ニ露ノ色ヲ変ズルナリ
立ハ立春ノ初ノ日ニ立春ノ節ニ成ルナリ
秋ハ陰気ニテ寒シ　ハ秋ノ初ノ日ニ成ルナリ
つゆ　ハ露ノ色ヲ変ズルナリ
ことしとなれハ立秋ノ初ノ日ニ成ルナリ
ことしとなれハ　ハ今年ノ秋ノ初ノ日ニ成ルナリ
ハつかの月　ハ八月ノ初ノ日ニ成ルナリ
萩ノ葉　ハ萩ノ葉ノ色ヲ変ズルナリ

初秋

秋立て五十日ハ八月ノ初ノ日ニ成ルナリ
立秋ハ八月ノ初ノ日ニ成ルナリ
八月ノ初ノ日ハ立春ノ日ニ成ルナリ

〈2002-148〉

早秋
彩秋
秋来
早涼

初秋乃部は月
立秋のふとともらこと初秋の部にあり
立秋のふとは新しくふハ立秋乃ふよりれ
立秋秋来なといふ新しくふハ秋くさくひしくふハ秋くさくひ涼しくふん
早涼至なといふさくひしくふハ秋くさくひ涼しくふん
なりこれも初秋乃ふよりる
せ乃紅松生乃萩の花扇とまとる

七夕

かくれざとひこりとといひめこるぐ流とうひとといふ
七夕乃ふとふむハ七夕乃ふと下男乃ふの名よかぞて
らへ七夕乃ふいんとろうてらむし或ハなれよあるのら
れさとのひ或ハ数つりもうこうというぐうりとーうう
ろふまちつくてハくるこうとまりハいうまくーうーひと
ゆりひ年ふ一数乃ゆりなくばなど長とゆりふ年こゆ
してまぐ初秋のこーう数よあひこゆりくんともらむと
こふかあるふ晩乃ゆりれとろーうさの舟ふうらく
せかともよりり又初ぐひの年とハ作ーのさ海ふ年也乃

ふ乃ふとうふ七夕ふなりてゆりんふよりふとふといのうな
うこうこうかふ長ふうハ初のこひなふゆても七夕ふ乃
せ乃ふうらとといふハ七月の乳牛の義ふ表さう乃ふて
それこうて棚乃義ふ地うくとこうさてこう乃ふ織とうて
今新天河ふ乃のうこうこうまりて牛となりべて流せと
ゆりり七夕ハうこうこうこの織とうてうてなふうーうともいひ又
ハ天川と舟ふて流せうーうともいう
ふせの初天川ふこうこのうーふ乃ふのこーーこうひ年織
いくーぬ牛ちぐうりうーぬ年のこうり年れあふ織
やもとのこうふ八十の舟津年ふ一数つまひうこ舟いふ機
衣とうもとうぐうりの云の義ふううう年初ひの糸衣とう
も天の玉床山乃ふ岩棚

乞巧奠

七夕まうりくこ庭ふとりーひとにて書とこきりうく
乃地とふ向て年とはこうる

残暑

残暑ハ秋乃はしめの題也或ハ扇にもちかきてつねん
といひ又ハ涼風をまつんなれとも古今著判詞に残暑
の歌ハ必しも残暑とハ見えずとも見し侍るさまと
あり残暑なしとハ見えぬ心ハ不知意し

草花

草花ハ萩なれとも となへしかるやからてさま萩
なとともよふ又ハ万くさのむらくさのむともよふと
又ハさく花とハかりいひても秋の心をよせてよふも
あり然して草花ハ何乃季にもあれと草むらと読よ
然ろハ秋とし

萩

萩乃名ハもとくく風をよせて合せくら萩にハ風のそ
よくか哀しくきこえされハそん心をよむかお意
萩かと乃さかりと真ところやうちハよそのさされとさ
ひしさやとなとかそてハるけて哀しなるやうにまよふ
ころもあり又萩乃葉のそよくと人のくるにまかへ
てもよむし又ハ萩の上風吹とも袖のちてちれそ

萩

みたれしともよふあり
よせ乃詞かすく風そよく風ふく風ちる風のやと
のまつてとところ分きりかへりむかれしさ淋
しきおりのあ

萩の名ハ花乃さかり見かりろこんとよむかお意
萩に風とよめしかく萩にハ家とよめり萩かひかとり
とうふハ萩のさかりなる中と分ゆるハ紫の色乃
錦をくるといふ萩のみつき八様をさそていふなり
萩の名とハ禁中にあり萩か花妻といふハ萩ハ鹿
乃妻といふ子細あり又小萩むらささなれハゆかりの色之元
いふ萩に鹿のむすまけりとよむ八鹿乃萩とむ唯よ
てかくし鹿の声かることいふハ鹿の萩をふくハ手
れて声かくしよそろ心にしくやさき秋ハ萩とつかさとれ
やる名にくし
よせ乃詞咲白ふる錦かさむさり鹿の声かくしかと

女郎花

ハよれかゝるとゆかりの筆とむらさき家本にも　名木なりても萩の〻せく

〽をとこへしハいづれの言もこれ女にはしくよあり花の
名ロなり是れハ女乃地とんよ云ひて男ハいはぬ形のさと
へていふし或ハ秀とたとへぐさよらうひ男山の咲ことし
とらふハぬしあゝ花よ云ひおもしめつしなまめかしやとゝよ咲て花代
うちあらうしといひなくて世風よなびくとあざ
なりともよめり
よせの萩ハねるかなびく露さておぼろのくゞろめく
いをぬるらしろめくし

荻　尾花

〽尾花ハ穂出てくろき袖よ似これバ風よおなびくと人
とまねくみえていうてしものとさハちるよいでぬよ
しし又花と云ハ波よ云ぞいやしぞ云ことも
まうかそれとも又ハ糸薄ハさゞくらきなよともよめり
よせの萩なぞよいろよ稲くなびく総波ハ人乃袂か

刈萱

まくらハむら
〽かるかやハ野よ苅人乱る乱れこゝろ地しらうてこゝろ
ろとよらうるのありし
よせの萩露ふるなびく乱る

蘭

〽らんハ藤ハかまの名ちらちらと乱ゆで花咲きハ蕉をされて
いろ付なるとそようつて野よも名よことあてさう
ぬざくなしなどよめり
よせの朝ぬし乱らてゆを名さとハこぐねざさう吾し上明ハ上非風

朝貌

〽朝貌ハ日ゟ君とあさて花ほひりのなれハこゝろ移もなし
よかるぶ上明ふさる人形し上明ふてされハ上明ハ白ふひらく花
きんといひ又ハ世のいかれさよさとくてもいふし
月影よいけよ秀よあくるふおきいでてうつハうれさ

葛

〽くずの葉ハ風よ裏ハひるがへりて葉のうら乃うら人世く
あいのくらうてうらみといひ葛の根よ多くふせて
よむことをべてくずの言かくらむさんとかましてよむ

秋夕

又くもかくるといひてかくろふ人なりしかまとゆふし玉
しかくくもとハ雲来のちぎりが玉のごとくえゆかし
大和葛の葉ハ風どよきあら安さり又秀とも
よ世の紐ふりこうむるふりハ花つく玉まく ハ妹風
「素性秋夕とて定家乃歌にハとくに大切乃歌ハく
よびも秋夕の歌ハ秋の夜をくやりて八母もうしろし
く身もあぢらきれく物思ひきなれる盛こうよろしむが
お哀しされバとてものうれわしくうれくしうう
ぬるれともをいふんもくりるべし又志あふて秋のあれし
きんといふもんとせざれども哀氣あるよくくのひ
さるまでハどのつりし秋の人もそなわるくとしかん
うまありけしとゝく慮にもとゞき歌とそ秋夕の字
らひあまりれ物あれしさみ夕乃哀をいふふやうに
よろしも哀哀なハあるど或ハ風乃ごとむしのね
五つをても物さびしくきあしまておぼろへこうしろ

秀

来乃宛まてとひいでゝ秋の字もちろいあくねんも
なすべき液ぞあるべし
よ世の紐さひしき物思ふよふしき秋ありくうきさ時
「秀ハ秋三月とも千よりて秀乃さかりといふハ八
月也第の盛にありしときわくさせるとかりくうぶひ風
よそぶるてとお乃露と見てえくろくくらくぶひ夜
夕ハせきて玉擇らんなどお哀し又のろく の字む
みとろう秋もよむべきしされど萩にもよ世かぞれろう
うもろしとてやさもせバ秀ハよせ物よなうりて荻萩の
おすろさりろべし傳歌にもなりさらみそえいのがひ
をべきし紫のなくかをとハ葉れ根よりゑさきへよろし
よ世の秋玉ぞゑぶふいひとぶおぶふる紫の露る玉
「のちきハ八月乃風の名とし暴風とうきてあらき風とせ
ちきさ乃風ともいひのきさとハ雨もよむし野分と
いへると一説に野分めきるる風といへるはんのちきさハ

野分

雁

一 〔?〕川と流るし 野分の吹立の時ハ川をこえてよむへし
大方雁かねハ用ゆ 雁ハよつて秋の若の木も雪き
ぐるる秋のまくらき流 かのえくもこれとこれにして
あれ雲も立よりふ雁或ハきの字ぞむくこころ
しやども我かえもれるんとよみりいろはものの
らきしき雁お歌 源氏物語のきこえきを見てよめる
なかぞ
一 よ世の雁啼をぶる吹くハ啼ウ海と川 吹しきる
秀くぐくなびきふ臣等
一 八二月乃なる字にえりて八月なるハよくうると字仍
十五夜の月にも合せけるなも有り一ノのむつき去
八ノのとびつれてるぞ文字如くうるに似ると又さる也
づきとうゑてきこつんといふ六のちくと乃 燕ハとふ夜の
胡国よとられ 啼鹿う道乃あらに文とつ 名て音字う
まつて まあるひ言をよるひいてうしくかはとよむ

ハ一ノう寄とふるしよつて古事ゆを気つらう達そさ
こ越なりし ふう更一ノ達と青に用ひきう又うう達て
いひて又鶴とよあうきも おもし比時ハうう達ハ只一ノと
いふるきき乃名所し一ノのいつといふハつうなうんし夜か
更う達 いふハ秋をさ比されハ夜と侍と秀句よい也
一ノのなきさといふ六十とよ浜のありてハあう穴うれ
鳴きうといふよりてなきくとも いふなるへし あちと
ふ一ノと八宗とよふるし 又舟にくてくうなもあう一ノの
鳴音とうろ比音に啼なしうう穴もあう又ハ篤くえくく
ときてうりもあう又やさ田うう達と八一ノのくうれハ宮田
うう啼ぶれハ秀句にいふ也しとねうう達とも一ノの字
八大秋京氣の穴しされと殺めうきさを稀さめの春
にも声とを啼て感とりよ和泉式とももあう又以一しうと
秋えくうんも お慈し擣衣月にも合せてう
よ世の雁ハくう啼ころ一声ういくつかもうらうハし 嶺と

鶉

鴨

虫

松虫

鈴虫

蟋蟀

[illegible]

ちくりの長枕の下とは詩經の豳風に七月在野
八月在宇九月在戶十月蟋蟀入我牀下とえうりう

蟋蟀

[illegible]八馬乃くりの[illegible]

[illegible]

促織

[illegible]

麻

麻八麻[illegible]

[illegible]

駒迎

[illegible]

[illegible]

月

一極俳諧嚢抄云三日月ハなきかの夕ぐれのなかにしらるゝ月
無余儀人云夕月ハ秋月のはじめにて人朔日比の夕月秋
なれども源氏物語にまたこれバ月の大小によりて二日の夕
よりも出ぬる中分明に人ミえ十日頃のの比までも
無事天にいづる頃の月と夕づくよとも緑なりハーし
「上」弦月とよむ ふつかの月八七日八日九日比ハ三義の中分ようて
半月にてしんくとよむにて人云月十五夜にて人にしられ
も月よりにして十四日五日六日つごもりまて人満月の二夜
源人云ともにあまり有明は霧露乃難氣にまたにおとる
にも人ひめのそびによりて有明とき 私云有明八月と月のかへ秋と云 不尽秋月八十二日に
てかくしつめて今よりひるかねとも待もらちまでて
の義に人 私云とひと合されて出の八 にいかりしいよいよいへりし 立待月十七日よて人子
細问お居待月十八日よて人子細问お臥待月十九日と
よむなりし 人源氏物語女系の誌の月二十日ハよう
と云臥所待の月をいふまさしせるなりくなりと

人彼聲家元日ハ八なりけるまゝ八十九日なくに月めんらんお
ぼへさ餘信越りて出たし人元日月無余儀人云弦月
九一日二日三日の月半月まとし人経のるまゝ人有明
月八晩まで待よづる来の月よて人又元日より内の月
とも終月にて及べバ有明にやうさきよりし先遊びされし人
一月の寄月ハといそくる気色よく在りし別あり
近来風躰云寄月ハ有明月同しまなうといへど寄月
おの影まて及秋の月入て後の月かゝるとあちなれ
八寄月とある気色まで八服あまりる月ハやしの及べも天
て後の月ある秋の月又いうる月とうかさいひふもくるじ
くくるとる月おとといふまゝ八服あまりる月なりくそへあり
入て後の月及秋の月などハ寄月といふめんなし
一八月十五夜の月ハかかりの月秋のなかハ秋のことなる
あしなる月なとといひて秋叶し
一九月十三夜ハ去月のことぞひ後のことよひともよむ又

菊なとゝよふ合てよふひとゝいふハ十三夜と云事は
ハしあしらひなき事もあれどさくにいといふらいひ
てハハ月十五夜とうかはりなけれハ名別といふ時ハ名ひ
一 め月といひてる影ハ影へのそてゐる月といふ有明の
月ともいふ又おるともいふあり
一 月の都といふハ月宮殿とし又此都ともいへる事あるなり
一 月の桂といふハ兼明苑曰月中桂長二百五十丈月輪中に有
下に有河此木秋花開ちるひこともいふハ案天論曰
月中は仙人桂樹有物生仙人足骨又或説に須弥山の南
にあたる閻浮といふ木ありその木の影月にうつりて
桂とみゆるともいふ 六今には
秋くれば月の桂の実やはなる光を花とちらすとかりを
くれはの月の光と花ふるとてなかし 又月のかゝハ
新葉集にとるやまもなかり
月のかつらの衣月の鏡などゝいふさきていふなく

霧

さてて月となむひつるいつるとよふらびしかなしわハ
くまなく新をかしく入るこの月は山の色とうくら或
をさらひを附まふらし志るむしりし昔の色と
おもひ我世更の秋とうしは或ハ恋の情なのハ述懐の
んといひ哀傷ようせ神祇又数の名みも名ぞらへ
るそく乃ことらせとといふかとなし
よ世の詞新光照をおきそうつるどつる入るなく
秀ハ秘を立てそれもさてかにしぬるとよむ事
或ハ世への手狩も秀をめてそれとらし孫ど秀とよむ
ともかくふ人乃笠の上もそれとふねど都ぶかり近て
ふ又ハ浦の波の昔もこしねとくられとと名推ことにあり
汐やの名かりもわれぬなとよむし又秋の山などに
れハおる絶の秀ハ暗てかりくよ かり袂とも
よむし秀ハ気と冷まじいふるべきし
よせ乃羽いくらいるなすびくべつかりハ暗る

稲妻

秋田

いなづまとゆふひは稲妻のことなり世者の紫の赤まうろ
しもしべてぎんぎんぎらぎらとかがやくなりさんとちりうろて世の
ひかりをよくとく又人の心のちぐさなるをあらそふひの
いなづまといふるハ女やこの世なりとも意氣おりろん
れがなるべーヌいは祝よりもふなりといふ者とうて
りてなり
世乃羽照とやどろやどんもあんの稲のくんてくれいふ
ぢあやどろからふひうり氣ふのこふろろ
秋田とうじょハぞるくしいまこのとさ秋風の者ぞうろ
ぬ意氣をいひうちの居も者をまなりてりうる
るんなることとり て農なとかーろをんともいひ秋風
吹びひでなることもつけ稲穂の月とうり居の者ま
なぐりてハりる秋もいてぐ者ろきうーともいふ又ハうり
ときひるれ猿の門田もこきとめてかさひ世のゆろ
なりの年といふなどうどくあるべーし稲穂のまこと

稲妻

いなハ稲穂のまこと穂なりとハ穂垂し又波
まこてもいふかの波ともなりうるこ波のうろ
とハうる世のりよいてろうが鬱よ似ろしくうかとハ秋穂
しやりりぐとハ穂のなりぐきもあてハ米あうといふ
わぐこと穂とかなりしこかり田乃名なと不可解斗
ふ世の羽なりろこりこかり居いかハぬよいうろうーは
いろづくわろうハ秋風はか稲の名田のろどくくし
きりここも者ろうともりひし諸ふしハ月九月四長夜
千聲万聲無止時とつくれうハ月九月やく秋きとう
かぢをろうるぐこ大ろこ搭衣の言ハうそうそ月ぐと搭
言うーー或ハきんこのろよ搭ぐうーて秋の秋きとこ
ちわ人の搭ぐを言ひやり又ハ搭ぐあれこきぬ搭よ秋
の者もこれそこ言ひあるこうるてうらしる
ゆうれハ女人もいとねるんれどこをこて搭衣のうそ
表なるる物ろうぬ搭ぐなるんれとおきしかりろく

與もろこしなどにはふかき意なるべし擣衣にハ忠とともそく
又蘇武のことのにハむかしの蘇武といふ者胡国にゆきて
年久しくかへらざりしに其妻夫をこひて秋のさむく
なるころに衣をうちて送りけるハさせんと侍り
其外にも八月十五夜の詩に擣衣砧上俄添死別聲又擣
衣の詩に擣處曉愁閨月冷裁將秋寄塞雲寒といふ
是も蘇武が古事と一しかれども詩に又擣衣を擣衣のこゝろも
るともありてもおなじ詩によりていふに擣衣の心ざしよ
まであるまじきあり よその袖おもふとも声いとあはれなるび
うちおそくむかしようらがでうら詩によものまつお
もきろおもひるよ擣さむつらのとこちも種ど
九月九日の事ハさく万物のさかりなるをいふとひ
又ちゝくの盃ハ千世とくむ気とも又ながつきのたふを
もよむべし

九月九日

菊

菊ハむかしの盛りたるしめしなどあり のちに延といひ白ひの

かくさとほかもみちぎりて千年のよはひをちぎるかく
ろなど和歌にも山路のきくとつゞけて仙境の心をよむな
るゝもあり菊の下水とつゞけて千年とのぶるといふハ
もろこしの南陽の酈縣といふ所の山に菊おほくさき有
其谷よりながれ出る水をのめば寿し其流の末に三十余
家の里あり此里人此水をのみて上寿をたもつ
文苑といふものにありと今人又彭祖と云仙人菊の下
水をのみて長寿をたもつこれらの古事によりていふ文
菊と白衣のことハ九月九日陶淵明菊の籬の
もとにいたりしに王弘といふ人のもとより酒を送りし
に其使白衣をきて来りしことあり此故事をもて
菊ハ人まろ時ハ白衣の袖とのよみあやまされたる
これもあるにより菊の花しぼむなどとも又
袖をそへて擣りて其外思をよするに人あまたによめ
花のごとし又他の家といふハ菊ハ諸花の後に咲物な

菊

世の初咲白菊千年と世下水山路のさもよわくたれ

菊といふ名ばかりなるもみぢ葉の色ばかりこそ秋の末なれ

初よりも出うつろふもみぢ葉の色ばかりこそ秋の末なれ

紅葉

紅葉は春の花のもみぢ葉の色ばかりこそ秋の末なれ

山本のもみぢ葉の色ばかりこそ秋の末なれ

しらぬ人の色ばかりこそ秋の末なれ

もみぢ葉の色ばかりこそ秋の末なれ

で陽山は春の花の色ばかりこそ秋の末なれ

春の花の色ばかりこそ秋の末なれ

の木の色ばかりこそ秋の末なれ

の紅葉ともいひつべき樹のおもてといひ木のかげといひて

八月の末といひつべきもおけし三月ばかりこそ秋の末なれ

暮秋

千一夜ばかりもくれぬひふりさかりこそ秋の末なれ

風さえふかしもくれぬ

うらさびしといひて秋なりくるしなどりはかよ

ふくんといひて実のひしもよりあさらう春

多ふかしたる秋のおもかげもくれぬとなりのこの春なりて

ての秋も秋ならんとしの春の春のあの秋

とちらさふいなくおもし

秋

世の秋くれてはがーひもちしかなりうかぶこの

有明の月ふかくれぬ

雲秋なおれしきし秋秋今いくらくれおくれを

いつし雲秋くれ秋ふる秋ともいふ月出日のくれを

もよひと

九月尽
暮秋
秋天象
秋日
秋風

「九月晦日のことをよむべし
「暮秋九月尽いつれともよむべし 惜しむこゝろを添べ
「きこし
「秋の月ともしは秋の日和乃くもりやさきさんといひ秋夕
霧の事ともいひ草葉に露置などゝよむも天象にして
雨雲風霜煙などにも秋とむすひてよむしらせの
「秋ハ物しくよろしかるべし
「秋の日ハ日和のうらゝかさもいひ又短日をもいひ又秋晴れく暮や
すさまじさもよむべし
よせ乃秋ハ新がれ、若くれ空とさ新かちとき
「新秋の心なしハとの様子新むの風も吹しの秋涼し
すゞしさをかしむられどあるべし又秋の夕風もいろとなく
さわしも松の風もとともかくしも涼べし その艶葉乃
よき夜そ天の音なそのよせおそれあさらの枝まつく
世の秋人乃葉染乃音もそゝて秋なしし落葉も社風ハ

秋雲
秋霧

「さまよひ吹かし世の秋への(く)さ木乃色をかれバなどいひ
て風のまゝたゞしくあつさしともいひ又ハ雨にもなく
てあはれとさぶらふ空に雲もよろし
よせの秋吹ハ雲のく雲かゝらに雨かゝり身にしむことにて
さそ秋くれ夜なびく草の葉あつきの八夜あらう
雲ハなびくてハ雲もし秋ハ雲あまよなるく空をむら
しされハ秋の雲とよむ也ハあのあるべし折ふよせ
のバ色の中よるべし 秋の物なとにいはれば雲か細の世の
雰ハ雲の事なるべし
「秋霧といふて影なハ或ハ雲秋の月やらねんといひ或
ハ秋霧の色とゞめよし又ハ月にもよせ夜とふつゞくと雨
霧の秋わひしの音くれをかかなくてもおまへの音よ
よせて秋乃俗ついまさうきよむべきこし
よせの秋の雲にも月空におりしひやさびの音もをか
秋なの花をよせあはるべし

秋夕

秋夕八三月のなゝ日のやうゝ月なゝてゝ月ぬれ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

晴夕八[illegible]

秋月

秋野

秋川

秋池儀

[illegible]

ハ水とよらむべし秋みづ川とハうら後てハみづ秋川うら
水しばうら後てもよ歌にもかハに水江水池水い
いれとも後べし

秋地三

秋ハ地をハ山野海川いづくにも秋の色色の分りあ
ることをかんがへるべしいづくにもあるべきことを
いふなり

秋眞

秋の色をハ野のちくさを山の紅葉とを秋田を稲
又ハおのゝの農とをつかりあるどらくさをあきみひろうん
いづれも色なるべし

秋植物

萩萩花とをれいしまた紫をか秋の草木いろいろと
もよむべし又ハをとをれ花もをうの松枝の緑とも

秋動物

虫鹿鳴蛙をか牛馬ふもとのをしも秋とひまをひ
をよむべし

秋思

秋思ハ秋の感をををををををををををををををををををを
ろもををををををををををををををををををををををををを

秋懷

秋思ハ秋の紙の多ハうををををををををををををををををを

秋月

萩のををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを

秋香

ををををををををををををををををををををををををををを
ハ百草のををををををををををををををををををををををを

秋声

鹿の多ク虫の声雁ガ鳴ク蛙ハ松風蛙の
ををををををををををををををををををををををををををを
も秋をひもをびてをををををををををををををををををを

秋器物

琴琵琶衣桁鏡鏡船のををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを

秋神祇

ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを

秋祓

ををををををををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを

いひ秋の田乃稲なかりさくてうとてこそ田ゆとうあ民や
したこそうのめぐこそこそ〜ひくいく万代と祝〜又ハ松
竹乃うへあも秋とひをびてうひべーうせ八朝ハ雨く
よううべー

○冬

初冬

初冬八十日稲日乃ひとゝもとゝ又今そこそ五三日乃ひんと
たやうあもうひべーしー寒乃あしもうさうハこけー
くふこそこそ乃今年さもいとハやみちぐれあく乃この八も
黄こぐれひぐ〜乃初も表ぐれてひとあ〜ハこなり
白雪ハうもひ乃水もいつーうゆそあ人うぐさもうれ乃
萩のうれつ〜孔秋とこれをみそうさ姫孫乃表もう
くなうり乃ぐれとし

時雨

うせの朝今さうハいつーしと風をさ鶴乃も初雪
ちぐれハ八十日稲今さうハうあうせーあうあうくな
ってハうこそうあうちぐれいくれうりうふ

落葉

らどとこさぐ乃なくあうれあうさんとうむうお恵こ
ちぐれあハ必ぬ吹そふ抱あれハ風とうこ合せうこうう
今ー ちぐれの光乃さぐうなうこと世乃つもならぬひ
よう秋〜こう根ようこうるちぐれ乃手こなうんちうこ乃やよ
ふりうこうる乃そこうさむく孫乃ちぐれよ美家う
美こさ手ー〜りぬちぐれよ秋うこうも又ハ本の山
萩こしこみぐ〜ひこもうり本の紫乃ちぐれこハ本の
ハの美ここの ちぐれよまうひし松風のちぐれこハ松く
うせの朝ぐりこハれこ宝あなうこいくうぐうこうこうこ
ぐう乃ぐうこうう孫うこうをを風さこうふれ孫く
やもくもぐうう孫ぐこうぐうこう
ー秋乃山の五紫も家ハさこひてうこうこれこうう
うう丹橋まぐ〜よなうり乃秋こいひ風のり孫よこう
ぐひて光ようこうこハ花をようう孫山のお紫うう

うかるゝ人のたよりせる舟をいふハ舟と一筋とい
がし立田川よ冬ハ流もせきとめられ大井
川ゟハくるゝといふこともなくついやすき所 岸の氷なと
ハ流れされども水ハ流るゝとも又ハ池の氷なと冬枯
て人もなき舟ハふかくかゝる跡所しとも蘆荻ハ秋よ
りかれて菰なとかれども未かれせて冬のゆかし席
紫苑とハ衣なとをかくいへるし又冬の紫の冬のハ云
よせの詞 ちらぬにハちらぬつゆの蘆に精あるの風さそふさ

残る菊

〽山陰谷陰などによく霜かゝりて残りたる菊 残菊
紫とハ残る菊紫也 あるとなるを残る菊と云
そひむ 風にふかれて かるく茎ふかくのハかるとなるとも
よせの詞 ちりのこりたる残菊の風に
とりても残菊に同じ

冬草

〽萩薄なとたくへしの霜かれども秋の名残
よせの詞 ちりのこりたる残る冬草に秋の名残 又ハ冬て枯て
草かれの草とも又ハ枯残りたる孫の草の名残

枯芝

さむくさともなりあり枯てひとつにかれたる物おしも
よせの詞 冬がれ霜がれハかれ野 冬野かれのゝ
〽枯芝ハ冬草ともなく又ハの人の乃ちくさも霜よてかく
ちりそく霜のさし残る色ともなし或ハ秋の野かれ
とをひそくあかれとりよろしく十くさかられかれハてく
残る小篠のみどり色をしとももくつみ跡といふハ冬枯
といふ又はのくさの名残にもあり枯野ハあかれあさら
らぬとそぞろさびしき物もおもしろく興ある物
ふよめる云ハふ枯つ
よせの詞 冬がれ霜がれハ霜さむき霜の下草冬の枯の
あさぢがれ枯たりおぼれ

冬蘆

〽冬芦ハ池入江なとにある芦をいふ也芦乃かれ葉など
云ハかれてしろく紫しりと志のといふハ枯かれて芦
乃ほのハかり残りくろし或ハ雪に霜とを霜とも物のと
うくらひ芦のかれハのさら風にさやぎかれハとてくいた

寒樹

霜

寒山の氣色とそへハ芦の葉にむすぶ霜なつかしさ寒
しとふもさハりなくうすひ水音の蔭もあらはに
てあらんなどしくれもしくもあり
よせの細なくれ霜がれかれしかれと霜かれかれる浦風
みさむくられおと鳴る白波舟のゆきさかるな
くれ成孫に霜枯の音さるが冬川てなきさんとも
へ寒樹とハ冬がれの梢のさむきさんし又松の梢の色
よせの細霜かれ冬がれさむき梢ハ風さゆる
へ霜ハさやくりなくさしもる枝ハあるつきの霜から
し古今に天の河のおの文月のあさとなりと後
るハ妙霜枝にハ鐘乃音もとまりてさやかなる起
霜枝のつるとハ孫ハつめさき乃霜といひてまそうに
つめさとりて夜しまか地にをくしうもつめさとりる
夜とくに秋あくさき霜とをり孫やの紅戸出る霜の
あかさと初音かとまりへ庭の落葉もあとれくしかれ

氷

くさ孫の霜枝の紅白ふかきあらしハ風露にとくるこ霜の
いろあるとハ霜くりりとハ霜ふかく霜まるしかれハ芦
の葉そてる露うちかたとおくかれ梢し霜乃花とハ霜の葉
紫に霜さるさせるか花の露うちあらしりくゆひの霜
とハ白髪とらようしらの霜も同し霜のふりかとハ霜
のかりさ庭し霜とかりとハ松の紫萩芦菊の枯紫の
霜にまよりてとらあひあるし霜さやくとハ竹の紫
萩の紫み霜とあハさやくと言のあるあし
よせの羽毛ひもとふかり毛するふ霜まることさやく
ふゆるかかりハ白妙かさむきさゆるかふる氣色く佐川ざ
清乃なさあり
へ歩と渡るにハあるハ庭乃池ありもこおりぬれ水音も音あ
あくかれよりくて結成滝の糸もと絶ハ鏡にさらて音
れく松風乃声のこほるしといひあるハ河水のよう
むろうつり歩みて夜やせの波がらり鏡るとも冬への水ハ

冬ゑ

よ歩のうへとうらみとうあるいとはのあ湖信濃国長谷川ハ歩あ
つくして氷のうへとハ人もうへとうらみとうらみぐく
なりぬれハ孤さうして海り物ことして人もあるくうこ
孤ひてうぬあよハ人うるみるなり言よかりて歩くく人
くなりぬれハ又孤のうるとうそれうるハ人くるハとと
なん青林良材等うこうこうこれと歩の橋歩のとハ通路などこうり
ちか近いの湖水などれもうり汐湖ことかうと入い
などよハうあううこうひといふハ歩くしいもうごうこと云
ハ歩のうごうこといふハ歩の西の後のやううよこゆ
うこうこうひとハつくくし歩ハ氣ぐぐアーこ時ハいよく
歩うこうーとうあうり
うせ乃河とうつひとうびとうおうあ水ちうこゆうこゆう
冬ゑハこあううこうこれて氣ちこうこ祇とこれ言し
くれううこうこうれ乃ちうこうこれいつうこれこうてくうあ
乃秀もひううこうこうふこうんんん乃歩もゑのひうう

千鳥

よこうこれうこうこれの素もゑの素よ氣ゑうこうこひ又
雪乃光よ映ちうこうこ素氣などうとくなるべー
うせの羽、新こうもうーこ氣ゑうこうこうこうこうこ
よこゆう氣乃うこうこうこうこうこうこうこうこ
ちうこうハ波ゑもハうハ河のみとこ又ハ入ハ波ゑもうう
ちうて水ちうよあうう拍しこうこの社よ波うこうハ賀義ハうち
うこうこうこ千ちうハハうこうこ乃感情うこうこあハれうこうこうこ
うこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
うこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
うこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
ちどう素なーこ千ちうなどうこうこうこうこうこうこ
くひれみうりのこ又ひとうハれてなうくハ交なーこう
どうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
ゆのひうう付ハをこうこうこうこうこうこうこうこ

きんとりあり
世の俗ハ波よりハ浪ハ波ハ波ハ波

氷魚はちいさきさかなをの白き地しろてあれはこれなり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雷

雷とは雨乃つぐさてふんとして八おみりこの雨の降
ぎりて又のこの雨をはつくろとゆこさしこ降きこ雨も
し雲りて雨まはれの雨はてふげなるろんとこのろ
よせの雨のろかふりつりろちりくろかきくくにかこさ
きてとのろうつひとはこ拾ふ所の下れ入を迷ふ
光るまぐふ脱ふまぐふ用ふまぐふかくこ
〔むこのこの四ハ山のくこさて八又ハ岩てもちかとはりこのとのり
てこここぐとこ入て岩くよやくくし 燈の立のちれこ雨
とこそこりここやりこの祈とよひこ立氣のつここ
かくつりもこ入くくこらまこころこーとこりかれこ茶
ひれこここくこ戻ハ寄立を拾の雨ろこり一ちぐ
立のちの燈ごこ雨のこつは燈これひくくも又ハ燈乃
雨ハ雨げの雨こ雨こりこ
よりはこ雨とこりつひこりこひこ雨
さひこうこ用ぐかれこ氣なこりこ
よせのこ

炉火

〔うつこ火ハこ雨ゆ雨乃ぐとこりこ炉火のあここりぬ
こりハ立乃ん流ととものひあこつきぐこハうつこ火も
流て祇さひこきこりーなとりこりこ火の雨こハうよ
こりこりこ炉ぐこうと雨こここくいりこ雨ここたハ
火とおこ流と人とあこもこりこていふ流このこ用
こ火としハふ雨こ立なりここて木の流ことくひここりこ
こりこりこ

推柴

〔よせの雨ぐひひこ炉火の雨よハ流こつこひこ雨の
〔うつこ火よ用ーー炉火の雨よハ流こつこひこ雨
推の木乃流ぐこ立の柴ハ柴ぐこせこーここ立のかこ
ーとこりこりこ雨こりこひハ立乃こりこ立こ柴立雨のこり
ここ雨又の雨打ここひこりこーとこりこ
よせ乃雨こりこ用こりこ柴ぐこせこ立こりこ
〔こつぐこ立ーー雨乃雨こ立こ流あここ用ぐこ立ぐど
ここりこ立こ雨ぐこ立こ雨こ立こ雨こ立こ雨こ

併えん

歳は春

[illegible]

[illegible]

[illegible]

除夜

冬天象

冬日

冬雪

冬花

冬鳥

有明の月雪よさしてはるかなるべし

ろくびくきの稲の穂のうづまき火も灰ばらはなれたるたとへ七

夕世の新稲を横たへ有明の月よりあとへそのかの稲

雲乃峰なの雪乃峰はのなどうむべし　冬の峰のなどうむべし

冬雲　雲霧もとぐらうるべし

冬地儀　山形波を水を色いづれもうむべし　雷雨雨雲雲霧

八天象なれどうやうの新とうと入をしてくらの雲霧も

水を乃雲乃雲らもいひうあべがされば世てうむべきこと

それも山とうひよいらの沿とうく芋入てあらうひよハ

冬雨　天象植物雜物等ともうと合もとべ

冬風　ちぐれなどおもしろし又材ならうばみとしとうべ

冬動物　ちきむく吹おろうかうおもしろ雷雨雨雲雷とも

ろ世の新稲きむきさきひきさ吹きうみ水吹むきみ

千年水をを稲〻鹿其外牛馬猿鶴さきもうれべ

ひよも冬とうは世てうむべきし

冬鐘　ちきよさしめおろうきろはタくり乃雷雲あべくあべ

ろうなとなるべ

冬寺　ろ世の新ひべくを声宝ろ花ささそ

冬木　ちしのとうひ乃声千を水を乃あくねあれをれ

冬山　のとうとうひべ

冬海　みこれの稲又松板まをとおへてもうむべ

冬川　冬これの山乃雲雲のさひきさ山又雲雲をれ花雲

とうせてうむとは儀は月

沖つ波も雪ふりぬれハ白あるよこうこうの波やいう川

ものいかろうハ雲まをびくとも又ハ雪はをを

ろうもハあくく波きくれハ沖の毎もかれきを

雲なをうもくあるべ又ハうをなとも波へ

ろ世の新波をきさ波ろくきさ波ハきひきちどう

り波の波も雲きひくく又ハ波よろうろ山ともいひ千を水

をともうもへ　又宗治川田上川ハ山ごろともうを

淀川むづ〻川よりつづけ川より流れとつて　と淀も冬川の魚とれ〻

秋かなるべし

冬の月は千年も水も甚不鶴鳴もとめ捕をみも冬と

よせの紅はさむきさいられこ水

むもとびてゝもひ、、

冬獣

冬の鹿牛馬猿乃類おもふことひもとぶ〻

冬旅

冬の旅のこひとゝ字はのいりてこれ初りも冬ぐれこ

のゆ山ぬさしてそのなづこ不二のこ根も雪ゆれの雲も

よハ凡くりり苦も枕冬ぐれゆればいとくゝしれねの雲も

結ひと松ひねゆ結ひ結ひ又結露のこびハかりつひ

雪よ路とこしなひ乃ゆこはもひかもひ山れどゆ

冬夜

ゝせ乃紅ハ新の紅の旅よゆ

松乃ゝゝりハ雪ゆとりて千年ひゆ

雪よ苦なるゝ年といゝひ雪ゆくゝ氣つゝゝ年、

甚ハ冬の雪ゆ冬ゆ年耕作ゆゝゆゝ

ゝせ乃紅の紅よ山